短歌史を書き継ぐ 梅原ひろみ

集タイトルを並べてみると、「短歌研究」で昨年六月号から今年四返りが行われた。歌壇も同様で、過去一年の短歌総合誌各誌の特 大型特集「平成じぶん歌」をはじめ、平成の特集が目立つ。 月号まで九回に渡って八十 のような自粛ムードもなく、改元前から様々な分野で盛んに振り で天皇の退位によって終わりを告げることになったために、 ○十年」の○の数字が増えていった平成は、 その翌年には株価が |崩御によって昭和の時代は幕を下ろし、平成に引き継がれ 年と半年前、 、バブル景気がピークに達しつつあった時 :暴落。景気後退期に突入し「失われた 九人の歌人がそれぞれの平成を詠んだ 切りよくほぼ三十年 期 前 に 回

歌研究」六月号では加藤治郎が「ニューウェーブの中心と周縁」かという点で、ジェンダー論も含めた議論となっている。今年の「短がですらまだ始まったばかりであるということ。命名者たる荻原深いのは、ニューウェーブの歌人とは誰を指すのかという定義付深いのは、ニューウェーブの歌人とは誰を指すのかという定義付深いのは、ニューウェーブの歌人とは誰を指すのかという定義付ですらまだ始まったばかりであるということ。命名者たる荻原かという点で、ジェンダー論も含めた議論となっている。興味ですらまだ始まったばかりであるということ。命名者たる荻原ですらまだ始まったばかりであるという点で、ジェンダー論も含めた議論となっている。今年の行知が、ニューウェーブの中心と周縁」かという点で、ジェンダー論も含めた議論となっている。今年の「短が明行」、六月号では加藤治郎が「ニューウェーブの中心と周縁」かという点では、こっている。

つけていく過程が始まるのだと予感させられる。これから振り返りが深まり、短歌史のなかでの落ち着き場所を見る。もとより歴史は当事者によってのみ書かれるものではないが、を寄稿し、当事者の目から当時の状況を書き残す試みを行ってい

藤治郎 始まりの部分とぴったり一致していることになる。 うとしはじめたこの時代が、偶然にも平成振り返りの対象時期 訳だ。すなわち、ようやくこれから短歌史の中に位置を見つけよ 場した頃が、図らずも昭和天皇の人生の終焉時期に当たっていた セラーとなって歌壇に激震が走り、 堅どころが顔を揃えている感がある。『サラダ記念日』が大ベスト 成二年に穂村弘『シンジケート』と続く。 に米川千嘉子 みると、 ここで前 元号単位で時代を定義づけたり、 『サニー・サイド・アップ』、小島ゆかり『水陽炎』。 改元二年前の昭和六十二年に俵万智『サラダ記念日』、 回の改 『夏空の櫂』、平成元年に水原紫苑『びあんか』、 元前後の、 当時の若手の ニューウェーブの歌人達が登 一つの印象に収めてしまうこ 現在の歌壇を支える中 第一 歌集の刊行 扷 翌年 況 平 加

で、時代の波は元号と関わりなく刻々と移ろっていく。 時代故に、世代が十年異なるだけでズレが生じ、一つの概念で捉時代故に、世代が十年異なるだけでズレが生じ、一つの概念で捉となく伝わるような気がする雰囲気の中身も、六十年以上続いたとなく伝わるような気がする雰囲気の中身も、六十年以上続いたとにはそもそも無理がある。例えば「昭和的なもの」と言えば何とにはでいている。

一つの機運提供という点に、より大きな意味があるように思う。ウェーブに限らず暫く止まっていた短歌史全体を書き継いでいく「短歌にとって平成期の意味は何か」という側面よりも、ニュー歌壇にとって平成の振り返りは「平成の短歌とは何だったのか」